

女子大学生における人間関係の枠組みと社会人基礎力

伏見 友里¹⁾ 井森 澄江²⁾

Personal Framework of Social Relationships and, Basic Social Skills
among Contemporary Students from a Women's University

Yuri FUSHIMI Sumie IMORI

要旨

本研究の目的は、女子大学生のもつ「人間関係の枠組み」を探ること、またその枠組みとレジリエンス尺度、時間的展望体験尺度の関連を明らかにすることである。調査対象者は、151名（年齢18～22歳）の女子大学生である。調査の質問紙は、フェイスシート、レジリエンス尺度、時間的展望体験尺度、ARS愛情の関係尺度などからなる質問紙を実施した。

その結果、レジリエンス尺度と時間的展望体験尺度の相関から、レジリエンス尺度と過去・現在・未来の時間的展望体験尺度との関連が示唆された。また、レジリエンス尺度とNEO-FFIとの下位尺度の正の相関がみられ、レジリエンスと性格特性との関連が示唆された。

キーワード：レジリエンス、時間的展望体験尺度、女子大学生、NEO-FFI

目 的

経済産業省(2006)は、学校教育と現実社会との乖離を克服するために「社会人基礎力」を提唱した。「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や社会の中で多様な人々とともに仕事をしてくために必要な基礎的な力」とされている。

「社会人基礎力」の特徴の一つは、個人としての能力や課題に取り組むための能力に加えて、「チームで働く力」が柱となっていることである。職場や地域の中でさまざまな人と共同して働くためには、自分の意見を的確に伝えるとともに、意見や立場、背景の異なるメンバーを尊重し、チームがよい成果を上げられるように、

集団の一員としてふるまうことが必要とされている。ここでは、「コミュニケーション力」や「リーダーシップ」といった、いわば個人のふるまいとしてだけではなく、常に変化する相手や状況を前提に、それに対応できることを、より重視している（経済産業省, 2010）¹⁾。近年では、社会人基礎力の育成が、様々な活動を通して実践されている。

近年、企業での社会人育成や学校教育において注目を集めているのが、レジリエンス（精神的回復力）という概念である。レジリエンスは、困難な出来事を経験しても個人を精神的健康へと導く心理的特性である。レジリエンスは、様々な要因によって導かれる力であるため、誰もが保持し高めることができるとされている（Grotberg, 2003）²⁾。また、レジリエンスは生得的なものを含む個人特性であるとともに、環境要因も大いに関係し、レジリエンスを促進

1) 東京家政大学人文学部教育福祉学科資料室

2) 東京家政大学人文学部教育福祉学科心理学研究室

する要因であるとされている。伏見・武井(2013)³⁾では、就学前の母子関係およびIWM尺度との関連から、レジリエンスを促進する要因として周囲との相互作用や幼少期の安定した親子関係が関係していることが示唆された。

今日においては、個人の特性や家庭等の環境要因についての研究に加え、困難や逆境に対する回復・適応にどのような要因が関連しているのかということも含めてレジリエンスと関連して研究されている。

また、大石・岡本(2010)⁴⁾は、レジリエンスに「維持」、「回復」という時間的要素が含まれていることに考慮し、過去・現在・未来での自己のあり方、すなわち時間的展望がレジリエンスと密接に関連していると述べている。

そこで、本研究では社会人基礎力のひとつとしてレジリエンス、時間的展望に焦点をあて、レジリエンスを日常的な生活における困難場面に対する適応力と定義し、女子大学生を対象に、対人関係の枠組みと適応力、時間的展望体験等がどのように関連しているのかを検討していく。

本報告の具体的な目的は以下の通りである。

1. 女子大学生のレジリエンス尺度、時間的展望体験尺度を検討していく。
2. レジリエンス尺度と時間的展望体験尺度との関連を検討していく。
3. レジリエンス尺度と人間関係の枠組みがどのように関連しているのかを検討していく。
4. レジリエンス尺度とパーソナリティ特性であるNEO-FFIがどのように関連しているのかを検討していく。

方 法

1. 対象者：首都圏A女子大学151名（1年生63名、2年生23名、3年生11名、4年生54名）年齢18～22歳（全員この研究の対象者に

なることに同意）

2. 実施時期：2014年5月上旬～7月
3. 実施方法：オリエンテーション終了後、質問紙を配布し、その場での回答を依頼した。また、同時にNEO-FFI人格検査を実施した。
4. 質問紙の構成：フェイスシート、段階評定尺度項目、自由記述項目からなる。

（1）フェイスシート（学籍番号、年齢、家族構成、現在の居住形態等）

（2）段階評定尺度項目：4段階評定尺度項目－養護性尺度46項目（岩治, 2005）⁵⁾、レジリエンス尺度22項目（伏見ら, 2013）³⁾、友人関係尺度17項目（岡田, 1995）⁶⁾。5段階評定尺度項目－ARS愛情の関係尺度12項目（Takahashi, 1990⁷⁾, 2000⁸⁾, 高橋, 2002⁹⁾）、時間的展望体験尺度18項目（白井, 1994）¹⁰⁾。

- 1) レジリエンス尺度（伏見ら, 2013）

レジリエンス尺度（伏見ら, 2013）を用いた。問題解決能力（6項目）、ソーシャルサポート（6項目）、自己効力感（5項目）、未来志向・楽観性（5項目）の22項目から構成されており、各項目について、「1. 全く当てはまらない」から「4. とても当てはまる」の4段階で評定してもらった。

- 2) 時間的展望体験尺度（白井, 1994）

時間的展望を明らかにするために、時間的展望体験尺度（白井, 1994）を用いた。過去受容（4項目）、現在の充実（5項目）、目標指向性（5項目）、希望（4項目）の18項目から構成されており、各項目について、「1. 全く当てはまらない」から「5. よくあてはまる」の5段階で評定してもらった。

- 3) NEO-FFI（NEO Five Inventory）

人格検査（大学生用）（下中ら, 1998）

パーソナリティ特性の測定にNEO-FFI人格検査60項目を用いた。NEO-FFIは、N神経症傾向

(Neuroticism)、E外向性 (Extraversion)、O開放性 (Openness)、A調和性 (Agreeableness)、C誠実性 (Conscientious-ness) の5つの次元から構成されている。5つの次元は、さらに6つの下位次元で構成されている。Nは、不安、敵意、抑うつ、自意識、衝動性、傷つきやすさ、Eは温かさ、群居性、断行性、刺激希求性、よい感情、Oは空想、審美性、感情、行為、アイデア、価値、Aは信頼、実直さ、利他性、応諾、慎重さ、優しさ、Cはコンピテンス、秩序、良心性、達成追及、自己鍛錬、慎重さをあらわしている。回答については、「1. 全くそうではない」から「5. 非常にそうだ」の5段階から評定してもらった。

4) Takahashi (2000)¹²⁾ により愛情の関係(人間関係)の枠組みを測定するために開発された「愛情の関係尺度 (Affective Relationships Scale:ARS)」を使用した。今回は女子大学生が調査対象であることから、愛情の要求を向ける対象を、母親、父親、最も親しいきょうだい、同性の最も親しい友達、恋人、尊敬する人、その他で重要な人の7対象とし、6種の愛情の関係の心理的機能を記述した12の質問項目(6機能×2項目)について、各対象に対する愛情の要求の強さの程度を「5. そう思う」から「1. 思わない」の5段階で評定してもらった。得点

の範囲は各対象別に12～60になる。

具体的な6つの愛情の関係の心理的機能とその項目の例は以下の通り。なお〇〇には母親等、各対象名が入る。1. 近接を求める(できることならいつも〇〇と一緒にいたい)、2. 心の支えを求める(〇〇が私の支えであってほしい)、3. 行動や存在の保証を求める(自信がわくように〇〇に「そうだ」と言ってほしい)、4. 激励や援助を求める(何かをする時には〇〇が励ましてくれるとよい)、5. 情報や経験を共有する(〇〇とはお互いの喜びを分かち合いたい)、6. 養護する(〇〇が困っている時には助けてあげたい)

本報告では、1) レジリエンス尺度(伏見ら、2013)、2) 時間的展望体験尺度、3) NEO-FFI 人格検査について取り上げ分析していく。

結果と考察

1. レジリエンス尺度および時間的展望体験尺度

(1) レジリエンス尺度

伏見ら(2013)に基づき、問題解決能力(6項目)、ソーシャルサポート(6項目)、自己効力感(5項目)、未来志向・楽観性(5項目)22項目の4下位尺度得点の平均とSDを学年ごとに表1に示した。

表1 各学年によるレジリエンス尺度得点

	1年生 (n=63)		2年生 (n=23)		3年生 (n=11)		4年生 (n=54)		全体 (n=151)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
問題解決能力	2.98	(.42)	2.93	(.53)	2.91	(.22)	3.04	(.54)	2.99	(.47)
ソーシャルサポート	3.15	(.68)	3.02	(.72)	3.21	(.43)	3.33	(.46)	3.20	(.60)
自己効力感	2.68	(.53)	2.59	(.51)	2.53	(.41)	2.75	(.59)	2.68	(.54)
未来志向・楽観性	2.74	(.59)	2.66	(.50)	2.91	(.44)	2.89	(.53)	2.79	(.55)
レジリエンス全体	2.90	(.42)	2.82	(.42)	2.91	(.23)	3.02	(.41)	2.93	(.41)

問題解決能力は、悪い状況を打開しようといろいろ試してみる等の6項目であり、困難な状況や目標達成に向けて懸命に取り組もうとするかである。ソーシャルサポートは、何か困ったことがあったら相談できる人、あるいは場所がある等の6項目であり、周囲からサポートを得られる環境にあるかである。自己効力感、自分で決めたことなら最後までやり通すことができる等の5項目であり、あきらめず目標を達成しようとするかである。未来志向・楽観性は、何事も悪いことばかりではないと考える等の5項目であり、あまり考え込まず希望のもてそうなところに着目するかである。

対象者全員のレジリエンス全体得点をみると、2.93であった。下位尺度においては、ソーシャルサポート、問題解決能力、未来志向・楽観性、自己効力感の順であった。

各学年の下位尺度得点およびレジリエンス全体得点において、いずれも有意な差はみられなかった。これまでの調査(伏見ら, 2013)¹²⁾¹³⁾では、年代が上がるにつれて、レジリエンス尺度得点が少しずつ高くなるという傾向がみられている。しかし、1年生は4下位尺度の全てで一番低い得点ではなく、2年生よりも若干高い得点を示していた。これには、各学年による人数のばらつきが影響していることが考えられる。

(2) 時間的展望体験尺度

白井(1994)に基づき、時間的展望体験尺度18項目を過去受容(4項目)、現在の充実(5項目)、目標指向性(5項目)、希望(4項目)の4下位尺度の平均とSDを学年ごとに表2に示した。

各学年の下位尺度得点は、レジリエンス尺度得点と同様にわずかながら4年生の得点が高い傾向がみられた。下位尺度において分散分析を行ったところ、「希望」 $F(3,147) = 1.57, p < .05$ 、「過去受容」 $F(3,147) = 5.712, p < .01$ に有意な群間差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、「希望」については1年生と3年生の間、「過去受容」については1年生と4年生の間に差がみられた。4年生が過去を受け入れ、自己の将来に希望を持つことができていることは、実習体験も含め将来について具体的なイメージをもつことができるようになったからではないかと考えられる。現在の充実感の得点が高いことからそのように考えることができる。

また、1年生の目標指向性が比較的高い傾向がみられた。これは、将来の目標を持ち大学に入学してきていることを示していると考えられる。

表2 各学年による時間的展望体験尺度得点

	1年生 (n=63)		2年生 (n=23)		3年生 (n=11)		4年生 (n=54)		全体 (n=151)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
目標指向性	3.33	(.88)	2.98	(.91)	3.13	(.48)	3.39	(.72)	3.28	(.81)
希望	2.95	(.70)	2.76	(.82)	3.30	(.31)	3.27	(.78)	3.06	(.74)
現在の充実感	3.28	(.77)	3.10	(.80)	2.87	(.46)	3.47	(.84)	3.29	(.79)
過去受容	2.95	(.93)	3.15	(.78)	2.70	(.50)	3.51	(.76)	3.16	(.86)

(3) レジリエンス尺度得点と時間的展望体験尺度得点との関連

レジリエンス尺度得点と時間的展望体験尺度得点との相関係数を算出し表3に示した。その結果、「レジリエンス全体」と「希望 ($r=.59$)」、「レジリエンス全体」と「現在の充実 ($r=.58$)」、「未来志向・楽観性」と「希望 ($r=.51$)」との間に中程度の正の相関がみられた。レジリエンス得点が高いことは、現在の自己を肯定的にとらえることができ目標を持つこと、未来に希望をもつことができるということがわかる。

大石・岡本(2009)⁴⁾では、時間的展望体験尺度の「未来」とレジリエンス尺度のすべての下位尺度、時間的展望体験尺度の「現在の充実」と「内面共有性」、「楽観性」、「遂行性」、時間的展望体験尺度の「過去受容」と「楽観性」との間に有意な正の相関がみられ、時間的展望体験尺度のすべての下位尺度とレジリエンスとの関連が示されている。

本報告でも同様に、レジリエンス尺度と時間的展望体験尺度のすべての下位尺度において、正の弱い相関がみられた。これらのことから、レジリエンス尺度は、現在・過去・未来である時間的展望体験尺度のそれぞれと関連していることが示唆された。

2. 対人関係の類型によるレジリエンス尺度

(1) 最高得点法による類型とレジリエンス尺度

Takahashi (1990, 2000) に基づき、母親、父親、最も親しいきょうだい、同性の最も親しい友達、恋人、尊敬する人、その他で重要な人の7対象それぞれのARS 6心理的機能得点の合計得点〈得点範囲12~60〉を求めた。高橋では最高合計得点の対象を個人の中核的な人ということで対人関係の類型を決定する。ただし合計点が36点以下をARS得点が極端に低い、他者にほとんど関心を示さないということで一匹狼型とする。高橋の研究によると一匹狼型は適応困難傾向が示されている。

レジリエンス尺度の下位尺度（問題解決能力6項目、ソーシャルサポート6項目、自己効力感5項目、未来志向・楽観性5項目）について各平均得点とSDを最高得点法による類型別に算出し、表4に示した。なお、ここでは最高得点法による対人関係の類型において祖母型に分類される1名を除いた150名を対象とした。

下位尺度において分散分析を行ったところ、「問題解決能力」 $F(5,144) = 2.50, p < .05$ に有意な群間差がみられた。他の下位尺度において有意な差はみられなかった。

表3 レジリエンス尺度と時間的展望尺度の相関

	問題解決能力	ソーシャルサポート	自己効力感	未来志向・楽観性	レジリエンス全体
目標指向性	.34**	.31**	.37**	.36**	.45**
希望	.39**	.45**	.41**	.51**	.59**
現在の充実感	.41**	.45**	.41**	.46**	.58**
過去受容	.22**	.30**	.27**	.46**	.41**

** $p < .01$

問題解決能力では、「多対象型」、「恋人型」、「母親型」、「きょうだい型」、「友達型」、「一匹狼型」の順であった。どの対象についても得点が高く誰が中核になっているかわからない「多対象型」や非家族を中核としている「恋人型」の得点が高い傾向がみられた。

また、「一匹狼型」は、自己効力感が一番低いにもかかわらず、未来志向・楽観性が一番高かった。未来志向・楽観性の項目には、「どうにもならないことに関してはあれこれ考え込まない」という項目が含まれている。佐藤 (1998)¹⁴⁾によれば、ストレンジ・シチュエーションでの回避型は、注意を成功する見込みのあるゴールに置き換える。しかし、環境の統制にゴールを置き換え、そのゴールを達成しても、愛着ニードは生物学的なものであり、完全な置き換えには成功せず、達成感が得られても空虚感に苛まれる可能性があるとされている。

本報告での、「一匹狼型」もどうにもならないことに直面した際、本来の目標ではなく、成功する見込みのある方向に目標を置き換える可能性が考えられ、そのため未来志向・楽観性の得点が高くなることが考えられる。それは、必ずしも成功体験、達成感につながるわけではないことが示唆される。

(2) 多対象型再分類法によるレジリエンス尺度得点

多対象型を母親・父親・きょうだい・祖父母という家族で構成されるタイプ〈家族型〉、友達、恋人、尊敬する人等非家族で構成されるタイプ〈非家族型〉及び家族と非家族で構成される混合タイプ〈混合型〉に分類し、最高得点法による母親型、きょうだい型等家族を中核とする型を〈家族型〉に、友達型、恋人型等非家族を中核にする型を〈非家族型〉に加え、対人関係の型を家族型・非家族型・混合型と一匹狼型に分類した。

レジリエンス尺度の下位尺度（問題解決能力 6 項目、ソーシャルサポート 6 項目、自己効力感 5 項目、未来志向・楽観性 5 項目）について各平均得点と SD を多対象型再分類法による類型別に算出し、表 5 に示した。

多対象型再分類法における対人関係の類型からみたレジリエンス尺度得点は、どの下位尺度においても「混合型」の得点が高い傾向がみられた。

下位尺度において分散分析を行ったところ、「問題解決能力」 $F(3,147) = 2.97, p < .01$ 、「ソーシャルサポート」 $F(3,147) = 3.24, p < .05$ に有意な群間差がみられた。Tukey 法による多重比較

表 4 最高得点法によるレジリエンス尺度得点

	母親型 (n=27)		友達型 (n=48)		恋人型 (n=22)		きょうだい型 (n=7)		多対象型 (n=40)		一匹狼型 (n=6)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
問題解決能力	2.98	(.45)	2.87	(.36)	3.03	(.55)	2.95	(.46)	3.15	(.50)	2.61	(.48)
ソーシャルサポート	3.06	(.67)	3.16	(.57)	3.37	(.52)	3.38	(.44)	3.30	(.64)	2.64	(.51)
自己効力感	2.70	(.42)	2.61	(.44)	2.77	(.65)	2.63	(.60)	2.71	(.66)	2.43	(.37)
未来志向・楽観性	2.75	(.52)	2.75	(.42)	2.72	(.69)	2.74	(.41)	2.88	(.65)	2.93	(.47)
レジリエンス全体	2.89	(.41)	2.86	(.30)	2.99	(.50)	2.95	(.37)	3.03	(.46)	2.65	(.25)

を行ったところ、「問題解決能力」では「混合型 (3.22)」と「一匹狼型 (2.61)」、「ソーシャルサポート」では「混合型 (3.40)」と「一匹狼型 (2.64)」に有意な差がみられた。その他の下位尺度である自己効力感、未来志向・楽観性には、有意な差はみられなかった。

問題解決能力においては、「混合型」の得点が一番高く、「家族型」、「非家族型」、「一匹狼型」の順であった。ソーシャルサポートにおいては、「混合型」の得点が一番高く、「非家族型」、「家族型」、「一匹狼型」の順であった。「一匹狼型」は群れず、気遣いをせず、ふれあい回避の傾向があると示されているが、レジリエンス尺度得点のソーシャルサポートにもそれが示されている。複数の他者に愛情の欲求を示す「混合型」のレジリエンス得点が高くなる要因として、多くのネットワークやツールを利用することにより辛いことや困難であることから乗り越えようとしていることがあるのではないかと考えられる。

また、「一匹狼型」は類型の中でも自己効力感の得点が一番低いにもかかわらず、未来志向・楽観性の得点が「混合型」の次に高い傾向がみられた。

2. 対人関係の類型による時間的展望体験尺度

(1) 最高得点法による類型と時間的展望尺度得点

時間的展望体験尺度の下位尺度（目標指向性 5 項目、希望 4 項目、現在の充実感 5 項目、過去受容 4 項目）について各平均得点と SD を最高得点法による類型別に算出し、表 6 に示した。なお、ここでは最高得点法による対人関係の類型において祖母型に分類される 1 名を除いた 150 名を対象とした。

全ての類型において有意差はみられなかったが、レジリエンス尺度得点と同様に時間的展望体験尺度得点においても「多対象型」の得点が高い傾向がみられた。

また、「一匹狼型」による目標指向性の得点が他の下位尺度に比べて高いことは、レジリエンス尺度の未来志向・楽観性の得点が高いことと関係していることが示唆される。

(2) 多対象型再分類法による時間的展望体験尺度得点

時間的展望体験尺度の下位尺度（目標指向性 5 項目、希望 4 項目、現在の充実感 5 項目、過去受容 4 項目）について各平均得点と SD を多対象型再分類法による類型別に算出し、表 7 に示した。

表 5 多対象型再分類法によるレジリエンス尺度得点

	家族型 (n=44)		非家族型 (n=84)		混合型 (n=17)		一匹狼型 (n=6)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
問題解決能力	3.03	(.47)	2.95	(.43)	3.22	(.58)	2.61	(.47)
ソーシャルサポート	3.09	(.67)	3.26	(.55)	3.40	(.56)	2.64	(.51)
自己効力感	2.73	(.56)	2.67	(.52)	2.71	(.66)	2.43	(.36)
未来志向・楽観性	2.80	(.52)	2.72	(.52)	3.08	(.70)	2.93	(.47)
レジリエンス全体	2.92	(.42)	2.92	(.37)	3.12	(.54)	2.65	(.25)

全ての類型において有意差はみられなかったが、レジリエンス尺度得点と同様に時間的展望体験尺度得点においても「混合型」の得点が高い傾向がみられた。

なかでも、「一匹狼型」の目標指向性の得点が高かった。これについては、レジリエンス尺度の下位尺度である未来志向・楽観性の得点が高いこととの関係が示唆される。レジリエンス尺度においても、下位尺度である未来志向・楽観性の得点が「混合型」の次に高かった。しかしながら、同じ未来の側面である希望に関しては、目標指向性ほど得点が高くなかった。

3. NEO-FFIとの関連

レジリエンス尺度と性格特性との関連を検討するため、レジリエンス尺度の4つの下位尺度得点とNEO-FFIの5因子(神経症傾向、外向性、

開放性、調和性、誠実性)の各得点について相関係数を算出し、表8に示した。

神経症傾向では、「神経症傾向」と「レジリエンス全体 ($r=-.48$)」「問題解決能力 ($r=-.25$)」「ソーシャルサポート ($r=-.26$)」「自己効力感 ($r=-.43$)」「未来志向・楽観性 ($r=.43$)」との間に中程度から弱い負の相関がみられた。外向性では、「外向性」と「レジリエンス全体 ($r=.62$)」との間に高い正の相関がみられ、「問題解決能力 ($r=.47$)」「ソーシャルサポート ($r=.56$)」「自己効力感 ($r=.41$)」「未来志向・楽観性 ($r=.39$)」との間に中程度の正の相関がみられた。開放性では、「開放性」と「レジリエンス全体 ($r=.29$)」「問題解決能力 ($r=.31$)」「未来志向・楽観性 ($r=.23$)」との間に弱い正の相関がみられた。調和性では、「調和性」と「レジリエンス全体 ($r=.33$)」「問題解決能力 ($r=.23$)」「ソーシャルサポート ($r=.29$)」「自己効力感

表6 最高得点法による時間的展望尺度得点

	母親型 (n=27)		友達型 (n=48)		恋人型 (n=22)		きょうだい型 (n=7)		多対象型 (n=40)		一匹狼型 (n=6)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
目標指向性	3.19	(.49)	3.15	(.82)	3.55	(.86)	3.29	(.86)	3.38	(.92)	3.37	(.81)
希望	3.00	(.67)	3.03	(.67)	3.09	(.93)	3.00	(.92)	3.16	(.76)	2.83	(.82)
現在の充実感	3.43	(.75)	3.10	(.82)	3.32	(.69)	3.26	(.68)	3.47	(.85)	2.77	(.67)
過去受容	3.37	(.76)	3.06	(.79)	2.95	(.90)	2.96	(.78)	3.33	(.97)	2.79	(.93)

表7 多対象型再分類法による時間的展望尺度得点

	家族型 (n=44)		非家族型 (n=84)		混合型 (n=17)		一匹狼型 (n=6)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
目標指向性	3.21	(.63)	3.27	(.86)	3.49	(1.02)	3.37	(.81)
希望	3.01	(.70)	3.08	(.72)	3.18	(.99)	2.83	(.82)
現在の充実感	3.35	(.79)	3.22	(.79)	3.66	(.78)	2.77	(.67)
過去受容	3.30	(.82)	3.06	(.83)	3.46	(1.05)	2.79	(.92)

($r=.28$)」「未来志向 ($r=.21$)」との間に弱い正の相関がみられた。誠実性では、「誠実性」と「自己効力感 ($r=.62$)」に高い正の相関がみられ、「レジリエンス全体 ($r=.52$)」「問題解決能力 ($r=.49$)」「未来志向 ($r=.33$)」との間に中程度から弱い正の相関がみられた。

レジリエンス得点が高いほど、神経症傾向が少ないことが示された。中谷ら (2002)¹⁵⁾の研究においても同様に、尺度全体、および3つの下位尺度について負の相関がみられ、精神的回復力(レジリエンス)をもつものは、神経症的傾向が低いことが示されている。

まとめと今後の課題

1. レジリエンス尺度、時間的展望体験尺度

今回の調査においては、レジリエンス尺度の年代差は有意な差がみられなかった。これまでの調査においては、年代があがるにつれレジリエンス得点が高くなる傾向が示されている。そのため、レジリエンス得点の年代差、レジリエンスを高める要因については今後対象者を増やし検討していく必要がある。レジリエンス尺度と時間的展望体験尺度の相関から、レジリエンス尺度と過去・現在・未来の時間的展望体験尺度との関連が示唆された。

大学生では、男性よりも女性の方が肯定的な

時間的展望を示すとされ性差により時間的展望の違いが生じる。性差による影響も検討することが求められる。

2. 対人関係の類型によるレジリエンス尺度

多対象型再分類法による対人関係の類型では、どの下位尺度においても「混合型」の得点が高かった。「一匹狼型」は類型の中でも自己効力感の得点が一番低いにもかかわらず、未来志向・楽観性の得点が「混合型」の次に高いことがわかった。

最高得点法による対人関係の類型においては、問題解決能力 $F(5,144)=2.50, p<.05$ にのみ有意差がみられた。下位尺度では、「多対象型」と「恋人型」の得点が全体的に高かった。多対象型再分類法と同様に「一匹狼型」は、自己効力感が一番低いにもかかわらず、未来志向・楽観性が一番高かった。「一匹狼型」はどうにもならないことに直面した際、本来の目標ではなく、成功する見込みのある方向に目標を置き換える可能性が示唆された。

3. 対人関係の類型による時間的展望体験尺度

多対象型再分類法による対人関係の類型においては、レジリエンス尺度得点と同様に時間的展望体験尺度得点においても「混合型」の得点が

表8 レジリエンス尺度とNEOとの関連

	問題解決能力	ソーシャルサポート	自己効力感	未来志向・楽観性	レジリエンス全体
神経症傾向	-.25**	-.23**	-.43**	-.59**	-.48**
外向性	.47**	.56**	.41**	.39**	.62**
開放性	.31**	.19*	.14	.23**	.29**
調和性	.22**	.29**	.28**	.21*	.33**
誠実性	.49**	.19*	.61**	.33**	.52**

** $p<.01$ * $p<.05$

高い傾向がみられた。最高得点法による対人関係の類型においては、レジリエンス尺度得点と同様に時間的展望体験尺度得点においても「多対象型」の得点が高い傾向がみられた。また、「一匹狼型」の目標指向性が他の3つの下位尺度に比べ若干高くなる傾向がみられた。

しかしながら、最高得点法、多対象型再分類法、のどちらの対人関係の類型においても有意な差はみられなかったため、対象者を増やし「一匹狼」の目標指向性が他の3つの下位尺度より高くなる要因を検討していく必要がある。

4. NEO-FFIとの関連

「外向性」と「レジリエンス全体 ($r=.62$)」「ソーシャルサポート ($r=.56$)」「誠実性」と「自己効力感 ($r=.62$)」「レジリエンス全体 ($r=.52$)」との間に中程度の正の相関がみられた。その他においても、全てにおいて弱い正の相関がみられ、レジリエンス尺度とNEOとの関連が示された。また、レジリエンス得点が高いほど、神経症傾向が低いことが示されている。レジリエンス尺度と性格特性との関連については、更なる検討が必要になる。

付 記

最後に、本研究にご協力いただきました皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 経済産業省 (2010). 社会人基礎力とは
経済産業省(編) 社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために
朝日新聞出版 pp.2-8
- 2) Grotberg, E. H. (2003). What is resilience?
In E.H.Grotberg (Ed.). *Resilience for today : Gaining strength from adversity*. Westport, Connecticut : Praeger Publishers. pp.1-29
- 3) 伏見友里・武井澄江 (2013). 女性のライフイベントに関する横断的研究 (1) —レジリエンス尺度の構成— 日本発達心理学会発表論文集, 428.
- 4) 大石郁美・岡本祐子 (2009). 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀, 8, 43-53.
- 5) 岩治まとか (2005). 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文
- 6) 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像に関する考察 教育心理学研究 43, 354-363.
- 7) Takahashi, K. (1990). Affective relationships and lifelong development In P.B.Baltes, D.L. Featherman & R.M.Lerner (Eds.) *Life-span development and Behavior*, Vol.10 Hillsdale, NJ : Erlbaum, 1-27.
- 8) Takahashi, K., & Sakamoto, A. (2000). Assessing social relationships in adolescents and adults: Constructing and validating the affective relationships scale. *International Journal of Behavioral Development*, 24, 451-463.

- 9) 高橋恵子 (2002). 生涯にわたる人間関係の測定—ARSとPARTについて 聖心女子大学論叢 98, 101-122.
- 10) 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60
- 11) 下中順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 (1998). 日本版NEO-PI-Rの作成とその因子妥当性の検討 性格心理学研究, 6, 138-147.
- 12) 伏見友里・武井澄江・岩治まとか (2013). 成人期女性の適応力の発達 (1) 日本教育心理学会第55回総会論文集, 367.
- 13) 伏見友里・井森澄江・岩治まとか (2013). 女性のライフイベントと発達に関する横断的研究 (2) —20代～40代女性のレジリエンス— 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 76.
- 14) 佐藤徳 (1998). 内的作業モデルと防衛的情報処理 心理学評論, 41, 30-37.
- 15) 中谷素之・小塩真司・金子一史・長峰伸治 (2002). レジリエンスと性格特性—精神的回復力とBig Fiveとの関連— 日本心理学会発表第66回大会論文集, 33.

Abstract

The purpose of the present study was to investigate the personal framework of social relationships shared by contemporary adolescent girls and relate that framework to a resilience scale and a time perspective scale. We surveyed 151 students from a women's university through a questionnaire that included a face seat, an ARS, a resilience scale, a time perspective scale, and so forth.

The results were as follows: there were positive correlations between time perspective and resilience, and. there were positive correlations between resilience and NEO-FFI.

Key words: resilience, time perspective scale, NEO-FFI